18　次の文章は、昭和十四年に発表された、太宰治「畜犬談」の一部である。作家の「私」は犬を毛嫌いしていた。しかし、山梨に引っ越した矢先、ある小犬が家に居着いた。彼はポチと名付けられ、気性のはげしい犬に成長した。東京三鷹にある建設中の家に再度引っ越しをすることになり、ポチを置き去りにしようとすると皮膚病を発症した。「私」の「家内」は「ご近所に悪いわ、殺して下さい」と言うのだった。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。　　　　　　　　　　　　〈香川大〉二〇二一年度出題

　「殺すのか？」私は、ぎょっとした。「も少しの我慢じゃないか。」

　私たちは、三鷹の家主からの速達を一心に待っていた。七月末には、できるでしょうという家主の言葉であったのだが、七月もそろそろおしまいになりかけて、きょうか明日かと、引越しの荷物もまとめてしまって待機していたのであったが、、通知が来ないのである。問い合せの手紙を出したりなどしている時に、ポチの皮膚病がはじまったのである。見れば、見るほど、酸鼻の極である。ポチも、いまは㋐流石に、おのれの醜い姿を恥じている様子で、とかく暗闇の場所を好むようになり、たまに玄関の日当りのいい敷石の上で、ぐったり寝そべっていることがあっても、私が、それを見つけて、

　「わあ、ひでえなあ。」と㋑罵倒すると、いそいで立ち上って首を垂れ、閉口したようにこそこそ縁の下にもぐり込んでしまうのである。

　それでも私が外出するときには、どこからともなく足音忍ばせて出て来て、私について来ようとする。こんな化け物みたいなものに、ついて来られて、たまるものか、とその都度、私は、だまってポチを見つめてやる。あざけりの笑いを口角にまざまざと浮べて、なんぼでも、ポチを見つめてやる。これは大へん、ききめがあった。ポチは、おのれの醜い姿にハッと思い当る様子で、首を垂れ、しおしおどこかへ姿を隠す。

　「とっても、我慢ができないの。私まで、むずくなって。」家内は、ときどき私に相談する。「なるべく見ないように努めているんだけれど、いちど見ちゃったら、もう駄目ね。夢の中にまで出て来るんだもの。」

　「まあ、もうすこしの我慢だ。」がまんするより他はないと思った。たとえ病んでいるとはいっても、相手は一種の猛獣である。下手に触ったらみつかれる。「明日にでも、三鷹から、返事が来るだろう。引越してしまったら、それっきりじゃないか。」

　三鷹の家主から返事が来た。読んで、がっかりした。雨が降りつづいて壁が乾かず、また人手も不足で、完成までには、もう十日くらいかかる見込み、というのであった。うんざりした。ポチから逃れるためだけでも、早く、引越してしまいたかったのだ。私は、へんな㋒焦躁感で、仕事も手につかず、雑誌を読んだり、酒をんだりした。ポチの皮膚病は一日一日ひどくなっていって、私の皮膚も、なんだか、しきりに痒くなって来た。深夜、㋓戸外でポチが、ばたばたばた痒さに身えしている物音に、幾度ぞっとさせられたかわからない。たまらない気がした。いっそ、ひと思いにと、狂暴な発作に駆られることも、しばしばあった。家主からは、更に二十日待て、と手紙が来て、私のごちゃごちゃのが、たちまち手近のポチに結びついて、こいつあるがために、このように諸事円滑にすすまないのだ、と何もかも悪いことは皆、ポチのせいみたいに考えられ、奇妙にポチをし、ある夜、私の寝巻に犬のがされてあることを発見するに及んで、ついにそれまで堪えに堪えてきた怒りが爆発し、私は、①ひそかに重大の決意をした。

　殺そうと思ったのである。相手は恐るべき猛獣である。常の私だったら、こんな乱暴な決意は、逆立ちしたってなし得なかったところのものなのであったが、盆地特有の酷暑で、少しへんになっていた矢先であったし、また、毎日、何もせず、ただぽかんと家主からの速達を待っていて、死ぬほど退屈な日々を送って、むしゃくしゃいらいら、おまけに不眠も手伝って発狂状態であったのだから、たまらない。その犬の蚤を発見した夜、ただちに家内をして牛肉の大片を買いに走らせ、私は、薬屋に行きある種の薬品を少量、買い求めた。これで用意はできた。家内は少なからず興奮していた。私たち鬼夫婦は、その夜、して小声で相談した。

　る朝、四時に私は起きた。目覚時計を掛けて置いたのであるが、それの鳴り出さぬうちに、眼が覚めてしまった。しらじらと明けていた。肌寒いほどであった。私は竹の皮包をさげて外へ出た。

　「おしまいまで見ていないですぐお帰りになるといいわ。」家内は玄関の式台に立って見送り、おち付いていた。

　「心得ている。ポチ、来い！」

　ポチは尾を振って縁の下から出て来た。

　「来い、来い！」私は、さっさと歩き出した。きょうは、あんな、意地悪くポチの姿を見つめるようなことはしないので、ポチも自身の醜さを忘れて、いそいそ私について来た。霧が深い。まちはひっそり眠っている。私は、練兵場へいそいだ。途中、おそろしく大きい赤毛の犬が、ポチに向って猛烈に吠えたてた。ポチは、れいにって上品ぶった態度を示し、何を騒いでいるのかね、とでも言いたげな蔑視をちらとその赤毛の犬にくれただけで、さっさとその面前を通過した。赤毛は、卑劣である。無法にもポチの背後から、風のごとく襲いかかり、ポチの寒しげなをねらった。ポチは、にくるりと向きなおったが、ちょっとし、私の顔色をそっと伺った。

　「やれ！」私は大声で命令した。「赤毛はだ！　思う存分やれ！」

　ゆるしが出たのでポチは、ぶるんと一つ大きく胴震いして、弾丸のごとく赤犬のふところに飛びこんだ。たちまち、けんけんごうごう、二匹は一つのみたいになって、格闘した。赤毛は、ポチの倍ほども大きい㋔図体をしていたが、だめであった。ほどなく、きゃんきゃん悲鳴を挙げて敗退した。おまけにポチの皮膚病までうつされたかもわからない。ばかなやつだ。

　が終って、私は、ほっとした。文字どおり手に汗して眺めていたのである。一時は二匹の犬の格闘に巻きこまれて、私も共に死ぬるような気さえしていた。おれは嚙み殺されたっていいんだ。ポチよ、思う存分、喧嘩をしろ！　と異様にんでいたのであった。ポチは、逃げて行く赤毛を少し追いかけ、立ちどまって、私の顔色をちらと伺い、急にしょげて、首を垂れすごすご私のほうへ引返して来た。

　「よし！　強いぞ。」ほめてやって私は歩き出し、橋をかたかた渡って、ここはもう練兵場である。

　むかしポチは、この練兵場に捨てられた。だからいま、また、この練兵場へ帰って来たのだ。おまえのふるさとで死ぬがよい。

　私は立ちどまり、ぼとりと牛肉の大片を私の足もとへ落して、

　「ポチ、食え。」私はポチを見たくなかった。ぼんやりそこに立ったまま、「ポチ、食え。」

　足もとで、ぺちゃぺちゃ食べている音がする。たたぬうちに死ぬだ。

　②私は猫背になって、のろのろ歩いた。霧が深い。ほんのちかくの山が、ぼんやり黒く見えるだけだ。南アルプス連峰も、富士山も、何も見えない。朝露で、下駄がびしょぬれである。私は一そうひどい猫背になって、のろのろ帰途についた。橋を渡り、中学校のまえまで来て、振り向くとポチが、ちゃんといた。面目無げに、首を垂れ、私の視線をそっとそらした。

　私も、もう大人である。いたずらな感傷は無かった。すぐ事態を察知した。薬品が効かなかったのだ。うなずいて、もうすでに私は、白紙還元である。家へ帰って、

　「③だめだよ。薬が効かないのだ。ゆるしてやろうよ。あいつには、罪がなかったんだぜ。芸術家は、もともと弱い者の味方だった筈なんだ。」私は、途中で考えて来たことをそのまま言ってみた。「弱者の友なんだ。芸術家にとって、これが出発で、また最高の目的なんだ。こんな単純なこと、僕は忘れていた。僕だけじゃない。みんなが、忘れているんだ。僕は、ポチを東京へ連れて行こうと思うよ。友達がもしポチのを笑ったら、ぶん殴ってやる。卵あるかい？」

　「ええ。」家内は、浮かぬ顔をしていた。

　「ポチにやれ、二つあるなら、二つやれ。おまえも我慢しろ。皮膚病なんてのは、すぐなおるよ。」

　「ええ。」家内は、やはり浮かぬ顔をしていた。

（本文は、筑摩書房『太宰治全集４』によるが、修正した箇所がある）

問１　傍線部㋐～㋔の漢字の読みを平仮名で書け。

問２　傍線部①の「決意」に至った過程を、「私」はどのように考えているのか、説明せよ。

問３　傍線部②とあるが、この記述にあらわれている「私」の気持ちとはどんなものか、それが生じた理由とともに説明せよ。

◎問４　傍線部③の記述がこの文章の中で滑稽であるのはなぜか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　㋐＝さすが　　㋑＝ばとう　　㋒＝しょうそうかん

　　　㋓＝こがい　　㋔＝ずうたい

問２　Ａ皮膚病を発症したポチを殺す勇気はなく、引っ越しで置き去りにするまでの我慢と自分に言い聞かせていたが、Ｂ不眠や酷暑、新居工事の遅れが重なって忿懣がたまっていたところにＣポチが蚤をうつしてきたことで怒りが頂点に達し、Ｄすべての原因はポチにあり、殺すことはやむを得ないと考えている。

Ａ＝３〔皮膚病を発症したポチを引っ越しを機に置き去りにするという目論見が書いてあれば可。〕

Ｂ＝３〔忿懣がたまっていくこととその原因を示していること。〕

Ｃ＝２〔怒りが爆発するきっかけを示していること。〕

Ｄ＝２〔殺すことは仕方がないという内容があること。〕

問３　Ａポチを毒殺しようとしているときでも、私の指示に従ってついてくる従順さを見せ、Ｂ私もほかの犬と闘う姿を見てポチとの一体感を感じているのにも関わらず、Ｃ結局は手を下そうとしたことに罪の意識を覚え、情けなく感じている。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔毒殺しようとしてもついてくるポチの従順さが示されていること。〕

Ｂ＝３〔赤毛との喧嘩を通してポチとの一体感を示していること。〕

Ｃ＝４〔結局殺そうとしたことへの罪悪感と自分への無力感が示されていること。〕

問４　Ａ自分たちがうまくいかないことの原因を病気になった飼い犬のポチにおしつけて殺そうとまでしたのに、Ｂ失敗したとたんに芸術家は弱者の味方でなくてはならぬという特権意識を前面に押し出した論理を展開し、Ｃあたかもポチに寄り添っているかのような態度で罪悪感を消し去ろうとする Ｄ身勝手さが読み取れるから。

Ａ・Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔殺そうとしたいきさつが書かれていること。〕

Ｂ＝３〔失敗の後の手のひら返しの指摘と芸術家意識＝特権意識を指摘してあること。〕

Ｃ＝３〔ポチを弱者に見立て寄り添う姿勢を見せていることを指摘してあること。〕

Ｄ＝２〔「私」のいい加減さ、勝手さを指摘してあること。〕